

## 新刊ニュース

### 書籍紹介

#### + マッテゾン「新しく開かれたオーケストラ」(1713年) 全訳と解説

村上曜 編著・訳 道和書院

道和書院から刊行された画期的な翻訳本です。「新設のオーケストラ」というタイトルで部分的な引用を通してしか日本語で読めなかった Das Neue-eröffnete Orchestre が全文翻訳されました。バッハ、ヘンデルらと同時代を生きた博覧強記の著述家マッテゾンの著作は当時の音楽状況や文化、思想を知るうえだけではなく、私達自身にも考える様々な課題やきっかけを与えてくれます。マッテゾンと言えば最も話題に上るのが調性各論でしょう。第2章「音楽の調について一情念の表出における属性と作用」に全訳されています。

#### + ハイニヘン「新しい通奏低音奏法 (1711年) 全訳と解説

久保田慶一 編著・訳 小澤優子 訳 道和書院

上記と同様に歴史的文献の全訳と解説のシリーズで道和書院のすぐれた出版事業と言えます。ハイニヘンに関しては1728年版の通奏低音教本が知られていますが歌詞からのインヴェンツィオの創出などの演奏実践と美学に及ぶ11年版の独自の価値を認めて訳出された意義は大きいと思います。現代における和声法や対位法他の教科書はプラクティカルな音の動かし方にウエイトが置かれすぎていますが、美学や思想全体を抱合する原典を訳書で読めるのは大変ありがたいことです。

#### + J・グリーア「楽譜の校訂術」音楽における本文批判：その歴史・方法・実践

高久桂 訳 道和書院

楽譜の校訂というのは音楽学の重要な領域ですが音楽の実践においてあまり意識されていないことではないでしょうか。過去の音楽を演奏するには楽譜の存在が欠かせませんがその基礎として音楽学者のテキスト批判と校訂には膨大な労力がかかっています。そのことを知れば安易に資料のコピーなどできないはずで、音楽学の基礎知識がないと若干読みにくい著書ではありますが真剣に音楽をなさる皆さんにはぜひ推奨したい1冊です。そして校訂とは何かということを知っていただきたいということが司書としての願いです。

(杉本ゆり 記)